

氏名	さいとうこうすけ 齋藤幸亮
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博制第 43 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目	小説と映画における現実と幻想
作品テーマ	（小説）座敷童の春
論文題目	小説と映画における現実と幻想 —ガルシア＝マルケス『百年の孤独』とフェリーニ 『8 $\frac{1}{2}$ 』を中心に—
論文審査委員	主査 教授 玉岡 かおる 副査 教授 豊原 正智 副査 教授 重政 隆文

## 内容の要旨

申請者からの、論文についての説明は以下の通りである。

題名にあるように、「小説と映画における現実と幻想—ガルシア＝マルケス『百年の孤独』とフェリーニ『8 $\frac{1}{2}$ 』を中心に—」として論文をまとめた。

ガルシア＝マルケスは、独特の語り的手法で作品を発表し、小説における新たな領域を開いた。多数の作品がある中で、『百年の孤独』をとりあげ、分析を行ったのがこの論文であり、特に注目したのが「魔術的リアリズム」である。

これは現実と幻想の巧みな融合を表現したものであるが、その特質を明らかにし、分析を行ったものが第一章である。

とりわけ、コロンビア出身というガルシア＝マルケスが、作中に描く南アメリカ大陸の地域、地域に伝わる独特の空気感、土俗的な雰囲気に着目。これは作家自身が幼児の頃に見聞きした非科学的な現象や、祖母から直に聞いた伝説など、現実なのか作り話なのかかわからないが実感として納得してしまった伝聞が大きく影響していると指摘する。

ゆえに、それらの地域を小説の舞台とすることで、さまざま起きる摩訶不思議な現象に対しても、即座に否定することなく、さもありなんと受け流すことができ、おそらくこの地域に生まれ育った者なら無条件に納得してしまう世界観であると洞察。

それを「集団的無意識」としてとらえていった。

次いで第二章では、この手法を映画の領域で同様に用い、現実と幻想が混在する風合いとして仕上げたフェリーニの代表作『 $8\frac{1}{2}$ 』と比較、並列することで、その表現法の特異性を分析しようと試みた。

この『 $8\frac{1}{2}$ 』は、映画制作に苦悩するフェリーニ本人が主演であるが、さまざまな幻想や願望を呼び起こし、ガルシア＝マルケス作品同様に、それらと現実との境界が定かでない物語を展開する。

したがって、鑑賞者にとっては、それが現実の物語のようでもあり、主人公の妄想のようでもあり、何が何だかわからない、といった奇妙な世界にひきずりこまれるのが作風となっている。

つまり、フェリーニ自身の意識の内部という、きわめて個人的な世界が舞台となっているわけで、これを「個人的無意識」とする。

これら二つを、特徴的に評価し、対比させるところに視点を置いた。

前者には「集団的無意識」、後者には「個人的無意識」という違いがあるにせよ、読者も鑑賞者も、何の矛盾も抵抗も感じることなくそれぞれの世界観の中にひきずりこまれるのは巨匠の巨匠たる所以であろう。どちらにも、主人公が今直面している現実というリアリズムの積み重ねがあり、それによって、ふいに挿入される幻想世界も、垣根なくストーリー展開の中で昇華され流れていくのである。

このように、出身国も時代も違う創作者ではあるが、その手法、その表現、その創り出す世界

には大きな共通項がみられ、それぞれに後進者に影響を与え続けているのもうなずけるのである。

次に、作品『座敷童の春』だが、以下のような内容である。

東北に代々暮らす宍戸家の人々の五代にわたる歴史を、襲いくる災害とそれを乗り越える姿を描こうという大作の第一部である。

宍戸家の一人娘りうが婿を迎え、その新築の家に用いる大黒柱を切り出す檜の森から物語は始まる。数百年の命を長らえた木は、樵夫たちに丁寧に切り出され、また十年を寝かされて材木となり、生命の宿ったまま、人間の家屋の主となるのである。

婿の源吉を迎えるにあたり、父彦助は検断の仕事も譲り隠居となるが、結婚のお披露目の宴会の場で、家宝の長檜にまつわる言い伝えとともに、この家の家紋である抱き柏のいわれなど、代々のこの家の話が語り起こされる。宍戸家は、戦国時代に東北で雄を馳せた伊達家の家臣で、政宗の時代に立てた手柄によりその長檜を下賜されていた。

新たに家を継いだ若夫婦には授かった子供を次々亡くすという不幸に見舞われるが、源吉は村のために働きたいと議員に立候補して初当選し有頂天。そんな中、りうが生みおとした喜亮ひとりは無事に育つ。だが、やがて政策のないことを村人に見抜かれ、源吉は次の選挙で大敗する。

そしてこの地方を地震が襲う。海辺育ちの源吉は、すぐに津波が来ることを予測して家族を連れて避難し村人にも勧めるが、選挙で信頼を失った源吉に耳を貸す者はなく、村は壊滅。

その復興を、りうは宍戸家が有する山から材木を切り出し分け与えることで協力し、源吉は、皆が食べていくため稲の品種改良が必要だと唱え、夫婦、それぞれに違う方法で取り組んでいく。源吉の研究は困難をきわめ、歳月を費やし、村人にも家族にも愛想をつかされるのだが、やがてヒカリゴメの生育に成功、夫婦は、やっと自分たちが大自然が与えた艱難を乗り越えたことを、しみじみと味わうのだった。

## 審査結果の要旨

・論文について

この論文は、昨年すでに及第のレベルに達していると審査されていたとのこと。

従って、大きく手直しすることなく、再提出されたものである。

まず質問として、大きな疑問を投げかけないわけにはいかない点があった。

というのは、そもそも、各界で巨匠と言われているこれら二人のアーティストには、他にも多数の作品がある中、どうしてこの作品に絞り込んだのか。

また、冒頭で大上段に「映像と小説は関連性がある」と断じてあるが、映像そのものは小説とはまったく別な表現世界であり、近年のような映像技術が進化した時代においてさえ、映像化は不可能、といわれる小説はたくさんある。それについての考察がないが、どう思うか。

また、映画はそこに体を置くだけで視聴者が同じものを見ることができる、とあるが、映画の場合、視覚だけでなく、音楽の効果や、振動、劇場ならではの体感といったものも、小説では得られない大きな利点ではないか、など、この論文でふれていない、あるいは考察していない点について、口頭で意見を訊いた。

申請者の答えとしては、そのあたりの考察と記述が足りなかったかもしれない、との反省であった。

以上のような点で、やや考察の深まりに欠けるところもみられ、他の小説や映画と比較検討がもっとあればさらに充実した論文になったであろう、との印象も残ったが、一定の水準は持っている。審査の途上で出た疑問点が手直しされるに越したことはないにせよ、提出された時点の完成度において審査はなされるべきであり、これら疑問や注文を反映させるところまでは求められないであろう。

総じて言えば、もう少し詳しく掘り下げて欲しいと思った部分はあるにせよ、大きな欠陥はなく、通して読んでも少々の疑問が浮かんでひっかかりはするが、論旨は伝わる。つまり、完成度としては満たされている、と判断ができよう。

両副査も同じ意見で、同様に、やや考察の深まりに欠けるところもみられ、他の小説や映画と比較検討がもっとあればさらに充実した論文になったであろう、と惜まれる点もあるが、水

準には達している、との判断で、三者、一致した。

・「座敷童の春」について

申請者自身の生まれ育った家や地域を舞台として描こうと思い立ち、調べ進むうちに、明治、大正、昭和そして先の平成の東日本大震災と、たびたびこの地方を襲った津波の記録に気づき、作品の中におりませっていくことにしたという。

内容についての評は、まず副査教員のご意見を聞くこととした。

お二方は、昨年度もこの申請者の審査に当たられており、その際、作品の未熟によって及第しなかったといういきさつを、よくご存じの教員である。

その折の審査結果は、論文はまずまず完成しており及第のレベルに達していたものの、創作作品において、雑であり、中身が希薄、との厳しい評価によって見送られたということであった。

したがって、今年度の審査は、創作作品がどうできあがったか、というところに視点が置かれることとなった。

その点、お二方も、今年度の提出作品にはおおいに成長、発展がみられる、との印象を抱かれたようであった。

まず豊原正智副査は、概略すると以下のようなご意見であった。

「宍戸家(菊地家)の五代にわたる東北の家族の悠久の歴史を、彼らを襲う様々な苦難を描きながら生きる希望の”春”をみいだそうという大作の第一部である。

彼らを囲む自然の情景描写、仙台藩の歴史とそれに関わる宍戸家の歴史、動植物の解説をとりまぜながら、この小説の最初の世代の物語が丁寧に描かれている。これらの情景描写や歴史、解説などは非常に丁寧で、小説に厚みを持たせている。随所に巧みな構成が見られた。非常にすがすがしい爽快感である。第二部、第三部が楽しみである。」

と、高い評価をいただいた。

また、重政隆文副査からも、

「ストーリーがまずあって、それに肉付けしていくというように書かれたものではなく、描写の積み重ねがまずあって、それが全体としてストーリーとして定着していたように感じた。ど

の一文をとっても丁寧で着実な描写がなされていて、描かれている風景や人物が目には浮かぶようだった。」

と、好評が出た。

総合すれば、小説としてのこの作品が、ストーリーが立っていること、描写の積み重ねができていて、登場人物の会話がふえ、より人間性が描かれていること、などに評価が集まったことになる。

構成や表現については副査から、よくできていたとの評価が高かったが、むろん、粗もあるにはある。

たとえば復興の折、山の木を切り出して震災復興に力を貸す場面で、樺の大木をまるで小さな救援物資を配布するかごとく簡単に表現している箇所には首をかしげたくなり、どうやって持ち帰ったのか、一本だけでは家は建たないはずだが、などなどリアリティ面で疑問が残り、取材がじゅうぶん行われたか、質問も出た。

これも、申請者の返答としては、指摘の通りであると、反省に至った様子であった。

両副査からも、当時、ランドセルはあったのかという具体的な疑問が出たように、陸軍から入ってきたというような特別な事情が書きこまれておらず、説得力が足りない部分もある。

とはいえ、三代の家族の物語が進行する中での主軸となる大黒柱も、それを切り出す山の風景描写がよくできていた、との感想であり、伊達政宗や独自の郷土料理など、背景となる東北の風土を浮き彫りにするためのエピソードが随所に挿入されている、などなど、評価が高く、指導教員としてはこの一年の指導の苦勞を賞賛されたようで、うれしいかぎりであった。

振り返れば、ここに至るまでの指導過程と本人の地道な努力にも、言及させていただく意義はあろう。

まず新学期が始まってすぐ、プロットを立てさせ、流れに沿って年表を作成、夏休みには地図や、平面図など、ありとあらゆる手段で創作者の中にリアルなイメージを描かせることからスタートした。後期が始まるとそれを文章にしていくという作業に進み、同時進行でイメージを文章に置き換えさせる作業にもとりかからせ、物語を積み上げていったのであった。

次いで、作品提出期を見据え、期間を逆算しながらディテールを彫り込み、檜の森や大黒柱のたたずまい、家宝の槍や掛け軸、家紋である抱き柏の紋、などなど、物語の空気を形成するモチ

ーフについて、一つ一つ深い取材を要求し、だんだんにできあがっていったものである。

しかし当初は、人物のキャラクターがなかなか読者の共感を得られるような人物にならず、何度も何度も書き直しを要求した。小説において、思考や行動で人柄を表す手法は不可欠であるというのに、まだまだその点においては今後も修練が必要である。

文章表現も、稚拙な擬態語を用いたり、主語と述語の呼応がちぐはぐといった、基本的な文学的表現を口うるさいほどに指摘し続けたが、まだまだ自発的には個性的な表現をみつけられないものの、指摘すれば直すことのできる従順さや努力する忍耐力は、小説を書く者としては大事な資質であろうと思われる。

問題は、構想があまりに大きすぎて、完結できるのかという点にあり、提出期限の迫った年末になって、第一部のみでいちおうのカタルシスを持った終了感を出すよう指導し、一年間の授業を終了したのである。

むろん、ディテールにおいては、なおも粗が多く、リアリティに欠けるがゆえに、せっかく積み上げた時代背景を壊しそうな危うさもある。

たとえばほかには、冷害に強い稲の品種改良に臨む現場や、津波災害、復興現場、主人公が立候補する選挙など、あまりに観念的で、取材不足というほかはないが、ストーリーが走るので、おおむね、破綻せずにリアリティは出せている。

また、大きな問題点として、両副査からも、次のような意見が出た。

昨年提出分では江戸時代末期から現代までを扱っていたのに対し、今回は第一部で終わっている。この第一部の書き方で進めば膨大な量になることが予想されるが、そういう意味でまだ完結していない印象を受ける。末尾の年表は、第一部だけのものにした方がよいのではないか。

以上が、重政隆文副査から。

また、豊原正智副査からは、以下のような意見。

二部、三部も読みたいと思うが、この段階では年表はない方がいいかもしれない。

そういった意見が出尽くしたうえで、総合してみると、ここで再確認したいのは、合格の基準である。

これら指摘の点については、末尾に添付した参考資料の年表にあるとおり、本当は平成までを書きたかったが、なにしろ膨大な物語であり、構想するにとどまった。今後、第二部、第三部

と、すべてを完成させたいと願っている、とのことであった。

参考資料として末尾に付けられた年表が、平成まで記されているにもかかわらず、本文は第一部のみであるのは、完成度としてどうか、との印象は重い。したがって、最終提出では、第一部のみの年表に改め、再提出するよう指導した。

また、参考資料としては、これら年表のほか、地図も作っていたはずなので、これも添えるよう、この場において指摘した。

さて、あらためて、審査の決定にもどろう。

昨年度は、博士課程の創作である以上、文学賞の第一次選考を通過するレベル、というあたりにバーが置かれたとのことである。

それでいくと、一次審査を通過するには充分と言えないかもしれず、補わねばならない部分もあるにはあり、そうなると基準に達しているとは明言できづらくなってくるのだが、格段によくなっている事実は無視はできない。昨年度は、大黒柱を擬人化するあまり稚拙であったものが、それを廃したことで重みが増し、大きな物語にふさわしくなったなど、評価を総合すると、成長いちじるしいとの印象は共通した。

一年を費やしたその進歩を評価し、三者の意見は、合格としてよいのでは、ということで合意した。

ということで、本年は、論文、作品、ともに本学が求める博士課程のレベルに達していると判じ、合格とすることで審査はまとまった。